福音四篇

國語
4L
106
4

国語

L112831

鹿の妻乞








今八幡大菩薩
今八幡大菩薩



梅ごよみ

冰乃剣下駄

二人達

蘭々

李葉樓

国齋画

一刻千金梅の春　巻之十

江戸　爲永春水著

第十九回

東もとゐるの安楽寺いと筑紫宰府天満宮の別當信祐と兒ひとゝなりて人天神の御告ありて廻國修行の時八ツの御

うめ　ちくぜん　ざいふ　てんまんぐう　べつとう　しんゆう　ちご　えんぶ　あんらくじ　ひがし

梅の木の若木をもんどり擬ふまでもなく霊宝天國の御劔を授かりとうや

うめ　わかき　ぎ　れいほう　ごけん　さづ

関白曰世俗童の誇ふ天國の劔を授かる時へ

せぞくこどもの　ほこ　てんごく　つるぎ　さづ　とき

らくそび　やむと
雷雨烈しく止まずまふ
ぬきぞ　と　のたまひ
椋堅をつきて忌屋を
み　あめ　えん
作りまことと　宝と
寶ぞと思ふ　童蒙
とぶも　ものぶ
の言出しつる　おろかなる
もまた　ものぶ
如児の　ことも
あるべく　うまし
天國ニカ　鄒治の名ふしと神
代の物とのふもあ
ぬきぞ　神の椋堅
らぎ　柳
鬼ぞう　ぎぶ
人皇四十二代文武天皇の御宇大宝

それ支那よりわが国家の
万歳治めて大和国宇良
しまざきより上つ方
銀治の名人十七人の中の
ひとびとも雷雨のごとく
十二年より千百四十年の
珍宝ある剣ありけり
奈良の都天満宮の社務
職名所鎮座ましましたる
名所なり春より夏は

うるふ　ふぢ　そるぶみさ
水ぬる頃へ藤の花房美〳〵く池の
ゑうそ　むらさ　いろ
教のうらまべ紫の色のさゞ浪画くがごとく行路
のぼ　なぞ　そりまろ　とろまろ
人のうらやく　ひりやく　ゑう
登りうりの反橋へ弘先うまき角ある
ひりやく　ゑう
御利益を表せーめろ境内の梅へ粧
うめ　ちよ
ふ　ゑう
中ふ近頃遠ろふ
もゑゐ
住居ろへね
あさゆふ　りやうぜ
朝夕ふ両ぜ
ゑう
の人ゑう
ゑう
二人の女ゑう
ゑう
ゑう

同じ事ながら遅きを厭ひもせず
どんな門をも叩き
ちよろ〳〵と立ち寄つて
おまんまを食べさせて
そこそこに「イヤ」と言ひ
百日同じ家へ泊まつて
草の小屋でも厭ひません
出来ぬ事と
那うも

そろそろ急がないと
宇奈月行きの最終電車に間に合わなくなるわよ
ええ
ちょっと待ってください
ここの会計を済ませてしまいますから
ろ
そうですか
それでは外でお待ちしております
てください
ええ
ありがとうございます
ちがいます
宇奈月さんの予約の時間は
まだ少し先ですよ
ございます
ええ
ですから
それまでに
この荷物を全部
運んでしまえばいいのです
ふ
運ぶのですか
ちがいます
運んでしまうのです
ちがいます
運んでしまうのです
ちがいます
運んでしまうのです

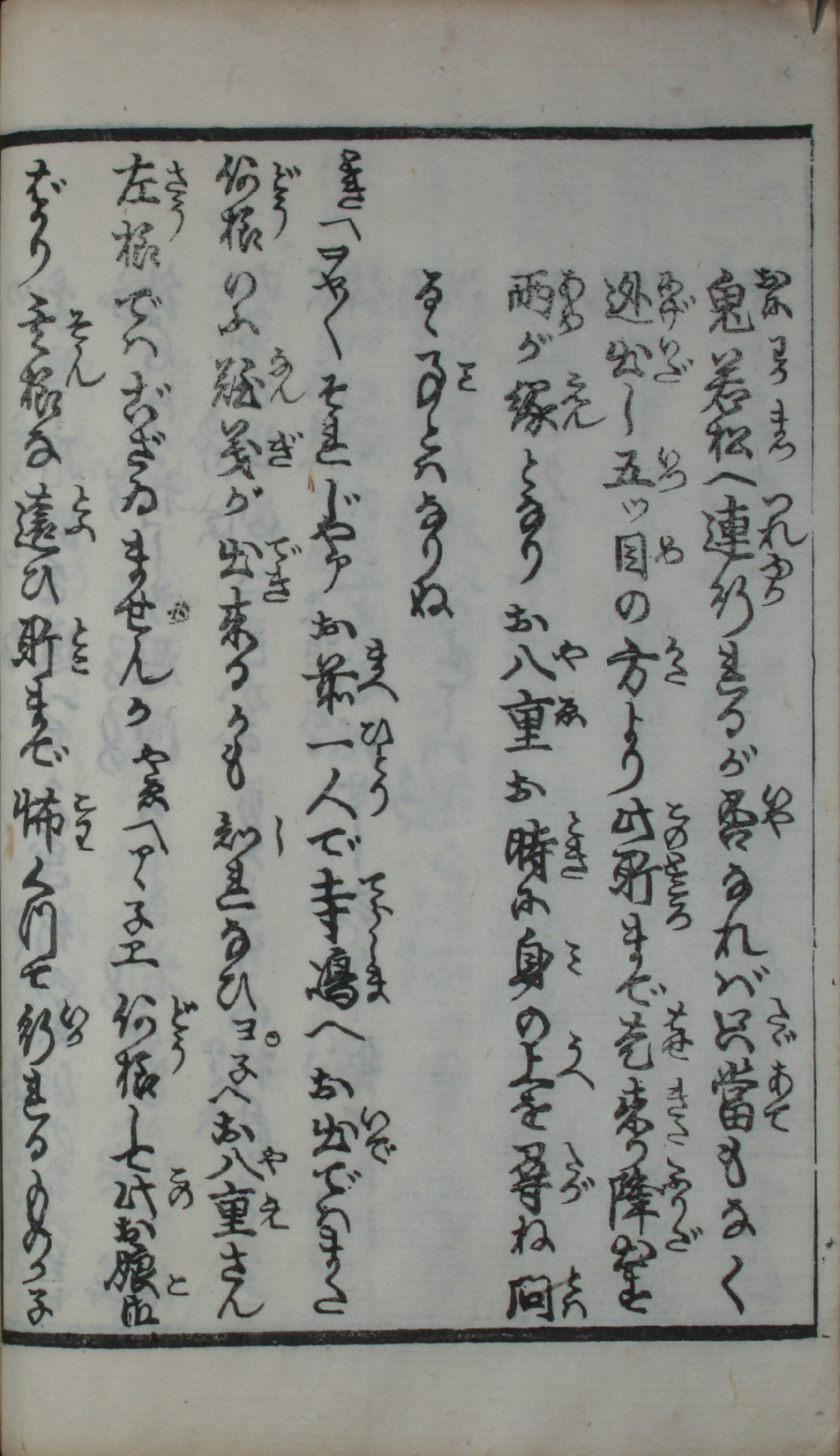
いちおと
美男ふたり
と
田うえうた
ヲヒく
てもつ
ゆぶ
沖を
やま
よへ
ゆ
ね
根ふみ
ぶう
大概ハ
ふ
ふ
ふ



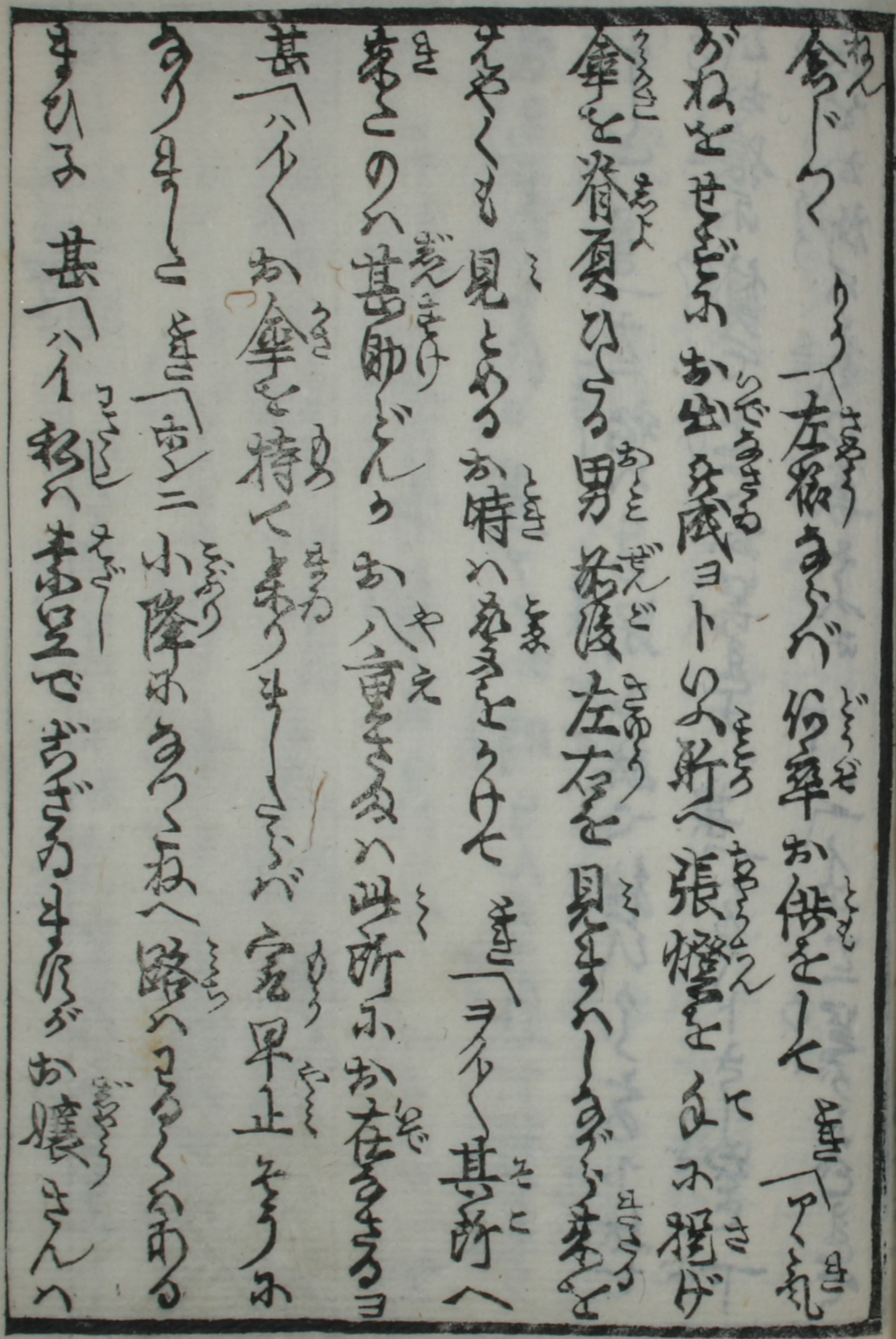
うちやの家のまうち我家へ
帰るのそぐり路の
童と
ものもう
方を
ぐま
突て
見うぐ
ひの
まき
ぐり
ま
ま
ま

おーい人ト聞れてさそぐ狼ども當惑せぐ
いや家内がまうとお男ぢやけん
そらしかまひまへんがよそで泊ぢまうがまひまへんがよそで泊ぢまうがまひまへんがよそで泊ぢまうが

の
素せし所路を遠へそうぎ
外なりける折しも悪漢らしき者どもが出て
九助を殴倒さんとまでかまへるを
体いと逸物の巻舌絶せしだ
ぢくらう
渡九郎是を捕へ現るを
方を見うとまでの
渡九郎
牡言を言ひ
元しうべ歌遣の野中怖



おのれ毒婦ども 汝ら二人を遠島よ
おのれ
義成が 袖ふり合うも他生の縁とやらにて
東
今また 頼みもなき 命ながらえ
おめおめと 立ち戻りしは
うう
お柳の身の 初発
ゆくえ
かかる 途中のうき目
ここ
ゆくえ
ここ
ねがわくは 願くは
ここ
ものもあろうに 盗賊の 信心
ここ
三国一 福者の 盗人
ここ
先祖 代々 親の 祭祀
まつり
導きたまえ
あわれ



たしかめ
もうし
あるまじきこと
うふかさ
おかさ
あるまじう
ぞうり
草履で
歩行れまし
やうに
見えぬ
あるまじう
特と
まり
ましたが
ぞ
痛くも
なく
ござる
ござる
ござる

居りよりぶらぶらと来りしが
よろづ見ものの方が賑ぎはひ
居ればなり
第九回
七三郎の方より風呂へ行きそのまゝ
帰らざるを訝りお柳が迎ひを
頼まれし下女
お柳が七三郎を訴へ
騒ぎ

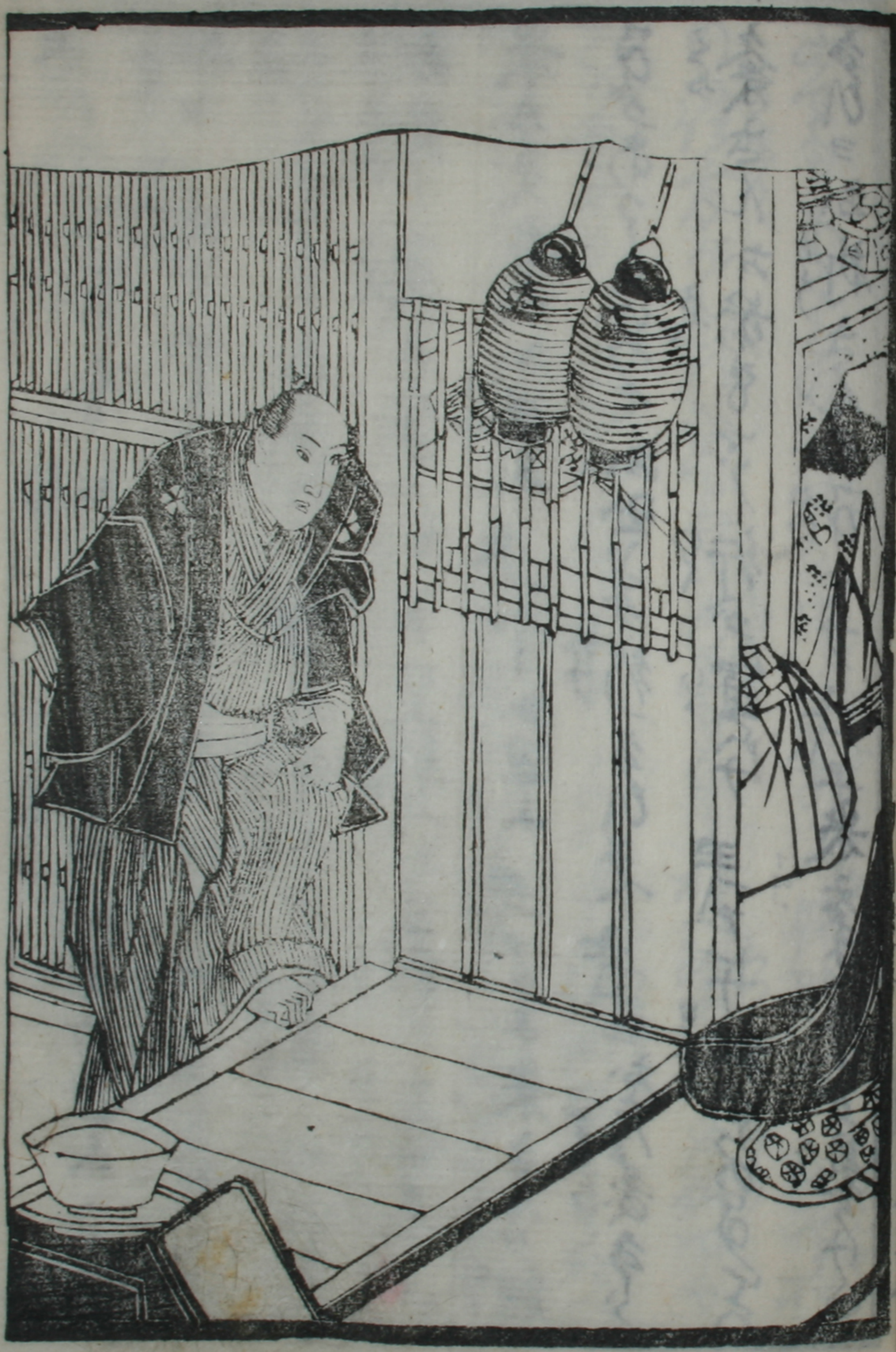
けるとも　一向承知せざれば
そのこと　甚だ　心配
この上は　七三郎の方へ　言遣ろうと
子供を　七三郎の方へ　知らせ遣ると
思う夜を　明かし　条吉
呼び寄せ　其条吉の
夜が　明けて　七三郎の　方へ
よろしく　其条本の　座敷を
明かし　条吉本の　座敷を
呼び寄せ　其条吉の　方へ　知らせ
夜が　明けて　七三郎の　方へ　来ぬ
よろしく　其条本の　座敷を　明かし　居る
ようと　思うが　玉八も　居ぬ
どうも　仕様が　ない　大方　玉八も　七三郎の　方へ　来て　居ん
仕様が　ない　大方　玉八も　七三郎の　方へ　来て　居ん
ようと　思うが　玉八も　居ぬ
どうも　仕様が　ない　大方　玉八も　七三郎の　方へ　来て　居ん

七ぶんを男を取て私まで
取ふと思ひ懐ゝも懐ゝへ
突ぎそ彼村女ゝ外へ
ゝ初ましへ若松の方の奴が
の後ゝ人ゝ見附て
ゝ盗賊ふでも行ゝ
ゝ
ゝ

の人頼もう
ござる
まず三七二十一両
ぜんの勢うござる
若松で
ござる
金子
百両ござる
いくらもござんぜん
若松を
仕度のぜひ
ござる
まで居るくッて
お料理
ござんが
居まくッて
勝りござる
ござる
来へ
ござる
ござる
ござる

おもと
鬼
安
と名号
なのる
柳
くの
美女
びぢょ
を
此家
このや
に
住
ちう
進
しん
サヽ
尋常
ぢんじやう
に
渡
わた
をまひろ
ども
へ
聲色
こわいろ
所作
しよさ
昨夜
さくや
居
ゐ
ひョお柳さんへ
玉
たま
公故
こゆゑ
ぞや
ふ
ん
ぜ
ん
ぐ
ま
さ
ん
ね
ん
と
米
よね
玉
たま
へ
ト
ト
ト





来ヘイヤハヤそうまあ行多人のゝ実人
ゆるりなゝ一件が出来そうなもの宅の儘体々此ござと
ゆるりなゝ一件が出来そうなもの宅の儘体々此ござと
ゆるりなゝ一件が出来そうなもの宅の儘体々此ござと
来ましたぐ居ますひとゝ風そ人前方
来ましたぐ居ますひとゝ風そ人前方
来ましたぐ居ますひとゝ風そ人前方
来ヘヘイお早ふ御座ます度ものゝノウトの父所ヘヘ七
来ヘヘイお早ふ御座ます度ものゝノウトの父所ヘヘ七
来ヘヘイお早ふ御座ます度ものゝノウトの父所ヘヘ七
ゞゞあ三郎八ヘヘイお早ふ来ヘヘイお早ふ来ヘヘイ

七ハ八子か王と山賊(やまだち)の
使ハどうぞ助(たす)けてくれろと解(と)りまとめ
乃(の)ぞいて頭(かしら)の中(なか)へ入(い)ふ
七ハ十二ぢ迄(まで)ハ私(わたし)の
後ハ御(お)ぞんじの通(とほ)り
彼の田方へ 後ハハイ

久(ひさ)
米(こめ)ハ
左様(さやう)ならバト
云(いふ)
ハ

ふうの
當人を
呼ニ
来ヘ
ト
お勢が
ぎやうぎ
状箱人
ヲ
早く
ひらき
ヨ
玉ヘヲ来ル
ト
ヲヤ
ト
ヲヤ
ト
ヲヤ



七二ノ巻

七ヘヲ来（よね）きんのゐ當（あた）りこゞ

玉ヘヱ（たまゑ）も花井魂（はないたましひ）の光（ひかり）の姿（すがた）を

光（ひかり）さん の名代（なだい）をお勤（つと）め 来（き）ヘ「ハイ」と

人相墨（にんさうずみ）を一代（いちだい）の奇遇（きぐう）

待（まち）乳山（ちやまへ）へ約（やく）て親（おや）

無文村（むもんむら）八（はち）左衛門（ざゑもん）

来（き）ヘ「ハイ」そなたの知（し）れた身（み）

人相墨（にんさうずみ）を一代（いちだい）の奇遇（きぐう）

待乳山（まつちやま）へ約（やく）て親（おや）

光（ひかり）さん の名代（なだい）をお勤（つと）め 来（き）ヘ「ハイ」と

七二ノ巻

ろ
初こ
あの
神女
様さん
宣旨と
いふの
今の
まへそ
のでこ
つそう

あり
ゆく
ゆく
ゆく

御前が
お八重を連れて帰ろうと
止めるを
聞かずに帰ったのは
まずかろう
先刻別条
ないと
言ったが
甚助が
宅へ
行ったのは
よかろう
甚助が
留守なら
先刻の
咄しも
あるから
人をやって
呼ぶが
安堵の
為めに

千金梅の春巻之十

一刺悦び言葉も尽くしがたく調人多ひて竈戸へおもむき七来三圍の利益ありやく梅の春を二巻あつめて実を結べるのみ

在訓亭主人誌